

2025.03.20

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

地域日本語支援ニュース こだま 第 453 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇

★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

■ともに生きる:埼玉県三郷（みさと）市より■

三郷市は埼玉県東部にあり都内に通勤しやすく、UR 団地を控え 2000 年頃から多くの外国人住民が住んでいました。2004 年に三郷市国際交流協会が発足し、その後、学習者の増減もありましたが、コロナ以降急増しています。この状況に対応している様子を次の 4 人のメンバーからご紹介いただきます。日本語教室代表の阿山（アサン）さん、副代表の成田さん、スタッフの古庄（ふるしょう）さん、後藤さんです。阿山さんはバングラデシュ出身のゲノム解析の研究者で、世界で活躍されており、副代表の成田さんとともに常に新しい活動を進めています。

埼玉県三郷市国際交流協会日本語教室

日本語教室代表 阿山晴取（アサン バドルル）

日本語教室副代表 成田真一

スタッフ 古庄由美子

スタッフ 後藤明子

◆学習者急増の中での工夫

外国人材の受入れが進む中、国及び地方自治体がボランティア中心の運営を推進する地域日本語教育にも変化が見えてきました。従来、地域日本語教育は日本語能力向上という大人の外国人市民の要求に応えつつ日本人市民との

相互理解を目的としました。しかし、コロナを境目に、三郷市内にある日本語教室にも様々な変化が見えてきました。特に支援者スタッフが高齢化し、学習希望者の中に子供（小学生、中学生）も増加しました。そのために、我々は教室にできるだけ多く若い支援者をリクルートすることにしました。そのおかげで、教室が活性化して、結果的に大人、小学生、中学生のために教室を分けて運営しています。

（阿山晴取）

◆コロナ以降の活動

三郷市国際交流協会日本語教室は、コロナ禍で閉鎖状態でしたが、2021年に再開への道が開けました。畑作業中に阿山晴取さんから「教室を復活させたいので手伝って！」と声をかけてきたのがきっかけです。その後、高野夏樹さんも加わり、半年の準備を経てスタッフ募集のオンライン説明会を実施。多くの協力を得て、教室再開が実現しました。現在、約60名のスタッフと120名の学習者（小中学生50名を含む）が所属し、地域の支えと情熱に支えられて成長しています。最近はバングラデシュやアフガニスタンの方が増えています。私自身もこの教室での出会いを通じ、充実した日々を過ごしています。

（成田眞一）

◆コミュニケーションとは「言葉+心」

日本語ボランティアを始めてもうすぐ4年目。いつの間にか私のグループは多国籍になっていました。ある時ひとりの学習者から、「あなたたちは共通の言語がないのになぜコミュニケーションがとれているの？」と言われ私にもなぜだかわかりませんでした。しかし、毎週日本語教室で接していくうちに、コミュニケーションとは、「言葉+心」なんだと思いました。私が心がけていることが2つあります。

- （1）大人も楽しく学習してもらえるように工夫する
- （2）初めて参加する日に必ず笑ってもらえるようにする

これさえできれば学習者も心を開いてくれるのです。

多国籍の方たちと共有できる、これほど楽しい時間はありません。

（古庄由美子）

◆日本語ゼロの方に教えるのには、工夫が不可欠。

ひとつのことを教えるのにも、説明が通じないことがこんなにもストレスだったとは。でも、学習者も同じ気持ち。言いたいことが言えず、伝えたいことが伝わらない。お互い様なんです。

学習者のひとりに、レッスンを始める時、「元気？」と聞くと笑顔で「絶好調！」と返ってきた。

私は最高に嬉（うれ）しかった。自分の状態をしっかり言ってくれてるではないか。自分で習得してきた言葉の意味を理解して私に使ってくれた。今がその言葉を使う場面なんだと判断したんだなあと思うと思わず笑顔になってしまう。

（古庄由美子）

◆子供たちと手探りの活動

自分の子供もボランティアとして一緒に日本語教室に参加し、小学生教室を担当しています。

日本に来てまだ数週間しか経たない日本語ゼロの子供から、日本生まれ、日本育ちで会話はスムーズですが、漢字や計算問題に困難を感じている子供たちまで一緒に、自分自身も毎回手探りで活動しています。

学習者数が多いため、各クラス 45 分間の 3 部制にしました。

短い時間の中で思うように進まない日もありますが、子供たちが日本語で冗談を言い合えるようになった時や、楽しそうに帰っていく姿を見ると、とても嬉（うれ）しくなります。

自分の子供と同様、この子供たちが中高生になっても明るい希望を持って成長してほしいと願い、前向きなスタッフのみなさんと協力して活動を続けていけたらと思っています

（後藤明子）
